

日本環境共生学会 第19回（2016年度）学術大会実施報告

大会実行委員会顧問・立正大学名誉教授 福岡 克也

大会実行委員長・立正大学 藤岡 明房

大会実行副委員長・立正大学 櫻井 一宏

大会実行委員・立正大学 小林 隆史

1. はじめに

2016年9月17日（土）～18日（日）の2日間、立正大学経済学部（品川キャンパス）において、日本環境共生学会 第19回（2016年度）学術大会が開催された。

初日である9月17日午前は、品川区臨海部に立地する品川清掃工場へのテクニカルツアーが実施された。午後には開会式が行われ、林良嗣学会長、開催校の齊藤昇学長から挨拶があった。その後の学会賞授賞式に続き、松波淳也法政大学経済学部教授による特別講演「大都市における廃棄物対策の現状」があった。次に「大都市圏・東京の廃棄物対策と今後の展望」というテーマのシンポジウムが開催された。

2日目の9月18日は、3会場での並行セッションにおいて口頭発表が行われ、ポスター会場ではポスターセッションが開催された。各セッションでは、都市・地域政策、人口減少・高齢化社会、災害問題、廃棄物・エネルギー問題、生態系など、タイムリーで多岐にわたるテーマに関し、本学会に共通した環境共生というキーワードのもと、熱心な議論が展開された。

2. テクニカルツアー

9月17日午前に実施された16名が参加したテクニカルツアーでは、品川区八潮に立地する品川清掃工場を見学した。同施設は東京二十三区清掃一部事務組合が管理しており、東京23区内の一般家庭や事業から発生する一般廃棄物の中間処理を行っている。47,000平方メートルの敷地に火格子焼却炉を2基有し、1日あたりの処理能力は600トンであり、焼却の余熱利用により15,000kWの発電出力を持つ。残念ながら今回の見学コースには入っていなかったが、同敷地内には、



写真1 レクチャーの様子



写真2 施設のコントロールルーム

現在都内ではごくわずかとなった尿尿等の下水道投入施設である品川清掃作業所が併設されている。

見学会の冒頭では東京二十三区清掃一部事務組合の職員の方による施設の概要説明（写真1）があり、続いて東京のごみ処理の歴史や現状についてのレクチャーがあった。また、品川清掃工場の全体像をはじめとして、焼却炉の構造や稼動状況等に関する映像を鑑賞して理解を深めた。その後、同職員による案内で施設内を見学した。廃棄物を運搬するトラックによる搬入から、廃棄物の一時保管やクレーンシステムによる

廃棄物の攪拌と炉への投入に至る一連の中間処理プロセスについて実際に見学することができ、また、施設内のさまざまな設備を集中管理するコントロールルーム（写真2）を見ることができた。同事業所では、資源再利用の取り組みをはじめとして ISO14401 認証取得など、環境マネジメントシステムを運用している現状についても言及された。

3. 特別講演

法政大学経済学部教授の松波淳也氏による特別講演は「大都市における廃棄物対策の現状」と題され、重要な都市問題のひとつとしてのごみ問題という観点から、まずはその基本構造について言及された。現代におけるごみ排出量の増加、最終処分場に関する問題、そして外部不経済の問題など、経済学的な視点を含めた廃棄物問題について述べられた。また、実際のデータなどを含め自治体の取り組みや課題など、具体的かつ現実的な話題に触れながらごみ問題の現状、そして今後の方向性についての報告がなされた。



写真3 松波淳也氏による特別講演

4. シンポジウム

シンポジウムは、日本環境共生学会が主催し、公益社団法人土木学会および立正大学による共催、品川区および日本地域学会の後援を受けて一般公開され、インターネット中継も実施された。テーマは「大都市圏・東京の廃棄物対策と今後の展望」と題され、上記の特別講演と関連した内容に基づいている。趣旨説明とあわせ司会進行は藤岡明房大会実行委員長が務めた。



写真4 シンポジウム

齊藤昇立正大学学長による開会挨拶の後、3名の登壇者による話題提供が行われた。

まず東京都の立場から、古澤康夫氏（東京都環境局資源循環推進専門課長）は「東京の環境対策」と題し、平成28年3月に発表されたばかりの「東京都資源循環・廃棄物処理計画」に関して報告がなされた。次に佐藤隆氏（品川区清掃事務所事業係長）および本間治夫氏（品川区清掃事務所リサイクル推進係長）からは、「品川区一般廃棄物処理基本計画（第3次）を踏まえた課題と対策について」というタイトルで品川区の現状についての報告があった。また、浅川勝男氏（東京二十三区清掃一部事務組合 企画室長）は、「廃棄物処理の現場より-23区のごみ処理における問題点と今後の展望」と題し、廃棄物処理の歴史にはじまり、テクニカルツアーの対象でもあった品川清掃工場の現状について、現場関係者ならではの視点で報告された。

東京という大都市圏における廃棄物問題に関して、都および区という行政の視点、そして実際の現場である処理場職員という視点から、それぞれの課題、現状についての最新かつリアルな報告となった。

後半はパネルディスカッションとなり、司会進行の藤岡実行委員長がコーディネータを務め、特別講演の松波教授、さらには4名の話題提供者がパネリストとして登壇し、本テーマに関して多様な視点から議論された。フロアからの発言も含め活発な意見交換がなされ、ローカルなごみ問題という視点から、区市町村などの都市レベル、より広域な都道府県、さらには国際的な課題としての廃棄物問題など、さまざまな立場、考え方によるディスカッションが行われた。

5. 学術セッション

2日目の学術セッションでは口頭発表とポスター発表が行われた。口頭発表は、一般セッションと企画セッションを合わせて12の並行セッションで実施された。このうち、一般セッションでは32件の発表があった。

ポスター発表では、会場でのポスター展示と2日目18日のポスターセッションコアタイムにおいて5件の発表があり、各ポスターの前で熱心な説明とディスカッションが行われた。

以上をもって2日間にわたる学術大会が終了した。全体で90名ほどの参加者があった。盛会裡に終えることができたのも、大会準備や運営に際し多くの方々にご協力、お力添えを賜ったことによるものである。あらためて、すべての関係者の皆様に感謝申し上げたい。

以上



写真5 口頭発表会場

6. 学会賞授賞式

1日目17日の午後には学会賞授賞式が開催された。木村美智子表彰委員長による挨拶の後、林良嗣会長から各賞が授与された。受賞者は次の方々（敬称略）である。

論文賞：木下朋大・盛岡通・尾崎平（関西大学）

環境活動賞：三井物産株式会社

7. おわりに

17日夜には立正大学品川キャンパス6号館の学食で懇親会が開催された。約50名が参加し、午後の特別講演をいただいた松波教授をはじめ、シンポジウム登壇者の方にもご参加いただき、議論の続きを含め、なごやかで楽しいひとときを過ごすことができた。